

# おカネは等身大の世界に帰れるか

大量生産・大量消費、グローバル経済の破綻に続くもの

〔参加者〕（発言順）

内山節…哲学者

吉澤保幸…場所文化フォーラム代表幹事・場所文化レストラン「とかちの…」大店長

中井徳太郎…NPO法人ものづくり生命文明機構常任幹事（人事院給与局給与第二課長）

岸本吉生…NPO法人ものづくり生命文明機構常任幹事（経済産業省中小企業庁経営支援課長）

私たちの  
金融大転換

増刊現代農業二〇〇九年二月号で内山節さんは、おカネの脱権力化を提起した。その提起を、元日銀マンで金融に詳しく、新たなローカルファイナンスを推進する吉澤保幸さん、中央官庁の官僚でありながら、ものづくりと生命文明にこだわり続ける中井徳太郎さんと岸本吉生さんほどのように受けとめたか。率直に話し合っていた。〔編集部〕

大量生産・大量消費を支えるしくみは破綻した

——前号で内山さんは、おカネの脱権力化を提起されました。サブプライム・ローンに象徴されるような国際金

融市場の問題に対して、「温かいおカネ」と言われたのは、どういう意味なのでしょう。

内山 今回の金融不安の根本には、おカネや金融といったものが人間の等身大の世界から離れすぎてしまったという問題があると私は思っています。

おカネというものは、「共同体の時代」から離れて「個人の時代」になればなるほど、その権力性を増します。おカネが自分の身を守る唯一の手段となり、そのうえに巧みな金融システムが成立するとかたちで金融の世界が展開し、その結果として、おカネ自体が非常に大きな権力をもってしまった。もともと人間の等身大の世界で使われていた、身の丈に合ったおカネが、いつ

の間にか、一つの権力として私たちを支配するようになった。その構造に、問題の根本があるという気がしています。

**吉澤** 長い間、私は金融にかかわってきまして、以前から、いつかおカネが暴走するときにくるという危惧をもっていました。そしていま、それがグローバルな規模で現実となり、私たちは、すみやかに対処法を考えなければならぬ事態に直面しているのだと思います。

そのとき、私は、まず、あらためておカネの本質を問い直して見る必要があるのではないかと考えています。いま、人びとは、おカネをもっていますが、心のなかの不安



内山節さん

安を払拭することができません。考えてみれば、おカネはもともと、人びとの暮らしを支える道具でしかありませんでした。けれども、いま、その道具に翻弄されてしまっている。おカネそれ自体には何の価値もないということに気づいても、ではどうしたらいいのかということとわからない、という状況なのです。

それと、いまひとつは、金融機関のあり方を考え直す必要があると思っています。日本の金融機関は、地域の金融機関を含め、全体が同じ方向を向いて、グローバルな資本主義、アメリカ経済を追いかけるような格好で展開してきました。それがいまの問題を助長した面があると考えています。

本来、金融機関というものは、資金を提供することではなくて、資金を預かり、それをどのように運用して人に返していくのかというところに根本があります。その原点のところに、どう立ち戻るか。それを考えることが大切なのではないでしょうか。

**中井** 私は行政という立場にいます。そこでずっと感じてきたのは、大きな社会システムが自分たちの身の丈の生活感とかけ離れたところで勝手に動いていて、自分はそのなかで役割を演じざるをえないという気持ち悪さでした。経済は大量生産・大量消費を基本に動いてきましたし、国家的な政策も、大きな規模で一律に

物事を決定し、動かしていくようなものでした。そうやって、大きなシステムを動かす技術が次々と生み出され、おカネがそれを助長するかたちで加速してきたと思うのです。

けれども、ここへきて、ついにその仕組みが成り立たなくなってきた。それが今回、世界的な金融・経済危機というかたちで顕在化したといえます。

この変化は、内山先生がおっしゃるように、個人のあり方の変化と同時に進行してきたことでもあります。人と人とのつながりが薄れ、個人が孤立・アトム化していくにつれ、社会システムは人間の生活から離れ、大きくなっけていきました。それが、たとえば、戦後に三種の神器が登場したり、人びとの生活が楽しく便利になっけていく方向で変化している間は問題なかったのです。ところが、自然環境との折り合いや、資源の制約が見えてきて、人びとはそこに疑問を持つようになってしまった。

いま、大量生産・大量消費的な生活やそれを可能にしていたおカネの流れ、そういったものがすっかり破綻してしまっただという気がしています。つまり、時代はすでに変わったんだということ。それを、国民一人ひとりが認識するときがきたのではないのでしょうか。

岸本 たしかに時代は変わったと思います。ただ、それでもやはり、おカネの流れはきちんと保つていかなければ

なりません。おカネの流れが金融の原理で急激に変化することは避けられないことですが、農家やものづくりをしている中小企業にとつては、それが非常に大きな重荷になっていて、たとえば四半期ごとのおカネの関門をどうやって乗り越えていくのかといったことが最重要事項であるわけです。

となると、ここで問題になってくるのは、これまでのおカネのルールに振り回されないおカネの使い方、預け方、貸し方ではないかと思うのです。

おカネには「一秒でも早く増えようとする」あるいは「増えてほしい」というおカネ自体の本質があります。それは仕方がないことですが、だからといって、そのルールにしたがってしまえば二十一世紀は相当難しい時代になる。

これからは、おカネをおカネだけの問題として考えるのではなくて、人間の生き方や価値観といった次元で考えていく必要があります。

いま、人類が直面している大きな問題の一つに地球環境問題がありますが、これもやはり、乗り越えていけるかどうかは価値観の問題になってくる。そういう意味ではおカネの問題と非常によく似ています。地球環境問題における価値観の問題とは、物質文明のあり方を見直すことでもあるのですが、物質文明のあり方とおカネ

のあり方というのは互いに関連を深くしているところがあり、ありますので、そういったことを包括的に考えていくべきではないかと思っています。

### ものづくりの世界、

### 小さな世界を支えるおカネの仕組み

内山 経済活動がここまで金融に左右されるようになった背景には、産業革命以降、追求されてきた大量生産・大量消費型の仕組みが、持続的な利益を上げていく収益モデルではなくなってしまったということがあるのではないかという気がするんです。

いまの世界には、まったく性質の違う二種類の生産企業があつて、一つは、労働によって本当に「もの」をつくっている企業。これは日本の多くの中小企業、農業も含めて考えていい。

そしてもう一つが、大量生産型の企業。たしかに何かをつくつてはいるのだけれど、その活動はどちらかというと生産流通管理、コスト管理が主になっている企業です。こちらは、一定の資金があれば容易に参入することができます。産業用機械を導入したり、あるいは加工された材料を買い集めてきて製品に組み立て、自分たちはコスト管理によつて収益を出す。生産そのものよりも資

金の回転のさせ方が重要であり、それはおカネでおカネを稼ぐことと非常に性質の近いものであるわけです。

つまり、中小企業の人たちや農家がものをつくっている労働と国際金融とはかなり違う世界の話なんだけれども、大企業などはじつはかなり似たようなことをしていた。だからこそ、大量生産・大量消費型の仕組みが安定的収益モデルでなくなってきたときに、大企業はおカネだけの流通で収益を出す方向に向かったし、最近までは、そのほうが収益の上がる時代でもありました。そして、その要となつてきたおカネが、世界的に見ればドルであり、それをユーロや円が補助してきたわけです。

いまの金融危機は、このように大量生産・大量消費型と結んだかたちで血液のような役割を果たしてきたおカネが滞り、場合によつては崩壊しかねない状況にあるということです。

ですから、その背後にあるものは、ちよつと金融政策を失敗したというような小さなレベルのことではなくて、産業革命以降、積み上げてきた合意事項が破棄されつつあるという、実に巨大な変化なのではないかと感じています。

吉澤 たしかに、今回の金融危機を金融だけの問題としてとらえると、間違えてしまうような気がします。産業革命以降、自然と労働と貨幣を市場化して、資源は無

限であるということを前提に拡大再生産の経済活動を展開してきた、その産業構造自身が問われているのだと私も思います。

ですから、それが立ち行かなくなつたいま、じゃあ自然とどのように向き合うのか、労働やおカネとどう向き合うのか。そういう問題なのだと思います。

たとえば大企業の世界では、よくバリュートチェーン(付加価値の連鎖)という言葉を使いますが、それをどう効率的に拡大していくかというときには、当然、おカネでおカネを生む世界が、関心事項になります。

けれども、おそらく本来のものづくりをしている人にとつてみれば、重要なのはバリュートチェーンなどではな



吉澤保幸さん

く、自然と向き合いながらどう自分たちの生き方を表現していくかということのほうだと思います。これまではバリュートチェーンに結果的に隷属されてきたけれども、そうではなくて、本来の自立したものづくりの世界をもう一度回復する。それが、いまの産業構造を変えていくことにつながるのではないかと思います。

そういう意味では、大きくものを動かすのではなくて、小さく紡いで積み上げていく。そして、そのためにおカネをどのように使ったらいいのかというところがポイントになってくると思います。

**中井** 大量生産・大量消費で拡大再生産する世界と、おカネがおカネを生んでいく世界というのは、非常に親和的であつて、われわれはそれに乗ってきてしまったわけです。人類は巨大なビルを建てることもできるようになつたけれども、半面、身の丈の幸福感を感じられなくなつてしまった。一方で企業も個人もお金にかすめとられてしまった。もう限界だということなんですよね。

でも、じゃあ自給自足の世界に戻るのか、おカネが介在しない物々交換の世界に戻るのかといえば、それもまた極端な話です。私たちはすでに、大きな社会システムに包まれて生活をしています。それが行きつまつたからといって、脱サラをして農村で農業をして暮らすのかといえは、もちろんそういう人もいますけれども、すべて

の人がそうできるわけではありません。

ですから、私の認識としては、大きな社会システムは行きつまり、時代は変わったという理解に立つたうえで、では、変化のプロセスのなかでどう順応していくかという手段論が非常に大事なだろうと思うのです。

いまの大きな社会システムが現に存在することは所与として、それと折り合いをつけながら、一方でまた別な手段を探る。いわばダブルスタンダードを持つて暮らすということですね。いまの世界に足場を置きつつも、もう一つ別の世界の中で、自分の身の丈の生命感・生活感を形成していく。そして、徐々にそちらの世界に主軸を移していくということではないかと思えます。

そうすると、その変化を可能にする意味でのおカネのあり方というものが非常に大事になってきます。まさしく命をつなぐ、人びとの身の丈に合った生活のなかでの温かいおカネの交換というものがあろうはずなのです。

日本人は大昔から、交易・交換という活動をしてきました。食べものをつくる人、器をつくる人、着るものをつくる人、それぞれの人がいて、そこにおカネを介在させて交換を行なってきた。それは、おカネを身の丈の生活を豊かにする道具として使ってきた人間の知恵です。

いまの金融制度にはいろいろな制約があつて難しい部



中井徳太郎さん

分もありますが、そういう意識をもち、金融機関にもできることがあるはずですね。あるいは私たち自身も、草の根金融的なことはできるはずですね。私たちはNPOで会費を払って友だちと食べたり飲んだり、そんなことは日常的にやっていて、それは「無尽」以外の何ものでもないわけですから(笑)。

ただ、いまは大変な転換期なので、急に大量の失業者が出るような事態が起こって、こんな悠長なこととは言っていられない状況になるかもしれません。ですから、そういうギスギスした話にならないように、いかに移行していくかということが大切だと思います。